



関西学院大学と私

著者	神崎 高明
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	25
ページ	58-59
発行年	2019-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027857

2018年
12月12日
水曜日

●退任教授最終チャペル講話／神崎 高明 教授（英語学）

関西学院大学と私

一 小・中学校の頃

私は一九五一（昭和二六年）年三月に兵庫県西南部に位置する赤穂郡上郡町に生まれた。上郡は町の中央を清流千種川が流れ、山々に囲まれた盆地にある静かな町である。

私は小学校と中学校は地元和学校に行った。小学校は各学年で二クラスしかなかったが、中学になると、町内の各地域から生徒が集まり、田舎の町とは思えないほど大規模な中学であった。戦後のベビーブームの影響が田舎町にも押し寄せていたのである。私たちの学年で九クラス・四百五十人の生徒数であったが、一年上の学年は十クラス、二年上は、十一あるいは十二クラスであったかもしれない。中学でもよい先生に恵まれたのは、幸運であった。なかでも幸運だったのは、中学一年生のときに、M先生という英語の先生に初歩

から英語を教わったことだ。東京の有名女子大学出身という噂のある先生の発音は素晴らしく、正しい発音で英語を話し、読む訓練をしていた。聞いたことは、一生の宝物となった。

二 龍野高校と大学入試

自宅から歩いて三分の所に県立高校があるにも関わらず、私は龍野市にある県立龍野高校に入学した。龍野高校が西播磨地区で一番の進学校であったからである。高校でも多くのよい先生に出会ったが、一人挙げると、それは英語のD先生である。

先生には英文法を徹底的に叩き込まれた。斎藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』を紹介してくれたのもD先生だった。後年、私が『熟語本位英和中辞典』の校訂に関わるとは、その時、夢にも思わなかった。高校三年の時、進学相談のため職員室にい

るD先生を訪ねた。私が国公立の英文科あるいは外国語大学に入って英語を喋るようになったと言うと、外大へ行くだけではだめだ。英語を喋りなければ、E S Sに入るよう勧められた。私は大学に入学後、E S Sに入ることを密かに決心した。

高校のクラスの生徒の大半は、第一希望は国公立大学に進学を希望していた。私も国公立を受験するつもりだった。ところが、その頃、全国の大学は学園紛争で混乱していた。

一九六八年十二月、東大の安田講堂が全共闘に占拠され、翌年一月に東大の入試が中止になることが決定された。担任のI先生は、ホームルームの時間に私たちに「東大の入試は中止されたので、受験する国立大学のレベルをランクずつ下げるように」と伝えた。そしてI先生は「国立大学を受けるものは、必ず力試し

に関学を受けるように」とも言った。当時、関関同立の中で関学だけが数学が受験科目に入っていたので、国立型の受験生は、力試しに関西学院大学を受けるものが、多かったのである。私も関学を受けることにした。

二月の初旬に関学の入試が始まった。経済学部が一目目にあった。テレビニュースには機動隊とゲバ棒をもった全共闘の学生が小競り合いをしている場面が映し出されていた。こんな騒動が起こっているなかで文学部の入試を受けるのか、と思うと、私は少し心配になった。入試当日は甲東園からバスに乗ったが、上甲東園公民館前でバスを降ろされた。現在、学園花通りと呼ばれる、桜並木の長い一本道は、入試粉砕を叫んでデモ行進をする全共闘で一杯だった。大学のキャンパスは全共闘

によって封鎖されていたので、入試は市道の南にある中学部、高等部と体育館で行われた。私は暖房のない体育館で試験を受けた。二月の末に合格通知が家に届いた。

三月の初旬に国立大学を受験した。その大学も、全共闘の学生により封鎖されているので、受験場は大学のキャンパスではなく、近くの高校で試験を受けた。結果は不合格であった。私は関西学院大学に入学することにした。

三 関西学院大学の学部時代

三月の末に、私は大学の学生寮である啓明寮に入った。この寮は鉄筋コンクリート作りで見た目は近代的な寮だった。だが、戦前からの長い伝統を誇る寮であり、旧制高校の寮のような極めて蜜カラな寮であった。四月になっても五月になっても授業は始まらなかった。学生は自宅待機の状態であった。私の場合は、寮で待機であった。高校時代にESSに入ることを勧められていたのだ、ESSに入りたいと思っていたところ、寮の先輩の中にKという名前のESS部員がいた。私はKさんの紹介でESSに入部した。

啓明寮は現在上ヶ原六番町に移っているが、当時は今の学生会館新館

の位置にあったので私はキャンパス内で生活したと言ってもよい。そして、入学式もないまま、六月三十日に新学期が始まった。この頃になると、寮生活にも慣れ、寮とESSのボックスと文学部の三箇所を行き来する活気のある夢のような生活が四年間続いた。

啓明寮生は全部で七十名ほどであった。寮生の出身地も様々であり、北は東北の宮城県から南は鹿児島県に及んでいた。寮内では色々な方言が飛びかった。寮生の中には、大学の体育会や文化総部など、スポーツや文化系のクラブに属するものが多かったが、学生運動をしているものもいた。若者の様々な価値観が衝突する場であった。まるで、国内留学をしたような気分であった。この寮生活を通して、人間の多様性を実感した。

六月三十日に新学期が始まるともに、クラブ活動も再開された。当時のESSは部員が三百名もいて文化総部一の大きなクラブであった。毎日杯全国英語弁論大会での優勝回数も全国一を誇っており、全国レベルで活発な活動を続けていた。ESSは五つのセクション（スピーチ、ドラマ、ニュースペーパー、ディベート、ディスカッション）に分かれて

いた。私はディスカッション・セクションに入ることにした。ディスカッション・セクションは、英語で政治、経済、社会の問題を他大学のESSと英語で議論をするセクションであった。その練習は体育会なみの厳しさがあった。

入部した最初、私はまったく英語が喋れなかったが、必死になって英語を勉強し、二、三か月もすると、かなり英語を喋れるようになった。おかげで英検の一級にも合格した。

三年生の時に部長に選ばれ、ESSのリーダーとして充実した一年を過ごした。韓国の延世大学や米国のスタンフォード大学とも英語による討論会を行った。四年生の夏には、私は日米学生会議のメンバーに選ばれた。この会議は戦前からある、権威のある会議であった。ハーバード大学であったその一週間の会議は刺激的であった。ゲストスピーカーもハーバード大学のライシャワー教授（アジア研究、日本研究）、リースマン教授（社会学）、キッシンジャー教授（国際政治）、MITのサミュエルソン教授（経済学）など多彩であった。

ライシャワー教授は東アジアの安全保障が講演のテーマであった。当時、一九七二年七月時点ではまだベトナム戦争が泥沼化しており、戦争

はいつ終わるとも先が見えず、人々の間には厭世的な雰囲気漂っていた。そのような状況の中において、ライシャワー教授はベトナム戦争はあと一年以内に終結すると言い切った。その講演会場にいただれも、そのことを信じられなかった。はたして、一年後、教授の予言通り、ベトナム戦争は終わった。

二年前の一九七〇年にノーベル経済学賞を取ったサミュエルソン教授は、日米の貿易摩擦の講演だった。当時、日本のGNPはようやく西ドイツを抜き、米国について二位になったばかりであった。まだ日本経済は弱小というのが大方の見方だった。そんな中、サミュエルソン教授は、十年後には日本のGNPは米国に追いつくであろうと大胆に予測をした。この予測そのものは当たらなかったが、その後の十年間の日本経済の躍進を見ると、一九七二年以降の十年間は経済的には、まさに「Japan as No.1」の時代であった。学生会議を通して、優れた学者の精緻な現状分析に基づく未来への予測の精度の高さに大きな衝撃を受けた。関西学院大学の四年間は多くのものを私に与えてくれた。

皆さんも、この四年間を有意義にお過ごしください。